

## ＜ワークショップ報告＞

### 1-A 「総合的な初年次教育プログラムを編成する」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

概要 : 「第2ステージ」に入った日本の初年次教育は、多様な実践活動を蓄積し、相互に情報共有するだけでなく、そうした様々なコンテンツからより効果的な教育内容・方法を精選しつつ、総合的で体系的なプログラムとして編成することが求められている。本ワークショップは、今年で5年目を迎える。毎年、個人作業・協同作業を織り交ぜたアクティビティを行い、そのワークの成果を翌年に反映させながら、内容を徐々に発展させてきた。これまでを振り返ると、1年目は初年次教育の多様なコンテンツに関する情報収集と整理、2年目はスチューデント・スキルの育成を機軸にしたプログラム実施の提案、3年目は3科目で構成するプログラムの到達目標と具体的内容の考案、4年目はプログラム編成の際に参考にしたい点、新たに試みたい点等の検討を行った。5年目の今年は、これらのワークの成果を総括し、そこで提案された初年次教育のプログラムを整理したうえで、各グループのベスト3を選び、その理由を発表してもらった。フロアとともにプログラムのバリエーションを確認するとともに、総合的な教育プログラムの編成方針を探っていった。

キーワード : 教育プログラム, 到達目標, コンテンツ, 総合的

### 1-B 「ディベート指導の展開方法」

担当者 : 松本 茂(立教大学)

概要 : 本ワークショップでは、つぎの(1)～(5)のことが可能になるように、参加者に実際にディベート活動を体験していただきながら、ディベート指導の展開方法について解説した。

- (1)ディベートを定義できる
- (2)初年次教育プログラムにおいてディベート活動を位置付けられる
- (3)ディベート指導において重要な分析のポイントを指導できる
- (4)ディベート活動のためのシラバスと指導資料を作成できる
- (5)ディベート活動を評価できる

キーワード : ディベート, コミュニケーション, 初年次教育

## 1-c 「協同学習の考え方と進め方」

担当者 : 安永 悟(久留米大学)

概要 : 近年、大学教育において協同学習の有効性が認められ、実践の輪が広がりを見せている。協同学習とは、学習仲間と共有した学習目標を達成するために、小グループやペアと一緒に学ぶことである。ただし、一般的なグループ学習とは違い、教育理論であり、理論に裏打ちされた学習法である。言い換えれば、小グループの教育的活用であり、学生が自分自身の学びと仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習法である。従って、学生を小グループに分けただけでは協同学習に期待される本来の教育成果を得ることはできない。そこで、本ワークショップでは協同学習の理論的な背景や一般的なグループ学習との違いを理解し、大学の授業に協同学習を導入する際の具体的な方法や注意点を取り上げ、協同学習の簡単な技法を活用しながら、参加メンバーと共に体験的に学ぶことを目的とする。

キーワード : 協同学習, 大学授業, 構成的教育観, 大学適応, 学習スキル

## 1-d 「頭と体の柔軟体操－身体知ワークショップ」

担当者 : 横山千晶(慶應義塾大学)

概要 : 身体を見据えたコンテンツをどのようにカリキュラムの中に意識的に取り入れていくのかは、高等教育の各分野で現在真剣に思考され試行されているテーマである。座学中心のカリキュラムの中にいかにして、身体性を導入したらよいのか、また体験したことを言語によりふたたび発信していくためにどのような方法があるのかについても、盛んに議論がなされている。このワークショップでは、想像力と身体的な「気づき」、および協働による活動を通して、からだと言葉をつなぎ合わせることにより、大学初年次にふさわしい言語力と思考力を構築する方法を模索した。題材はシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』である。今回は120分のうち、最初の30分程度を場になじむ身体ワークショップに費やした。協調的な雰囲気が出来上がり、身体が柔軟になり、声も出るようになったところでさっそくスクリプトに取りかかる。ここではあえて原語にこだわり(スクリプトそのものはそれほど難しいものではない)、言葉のもつ音そのものがどのように物語と関係しているのかを、ドラマワークショップを通じて体感した。最後に全く同じシーンを二つの映画の中で見比べることにより、「ことば」がどのような想像力を経て新たな創造へとつながっていくのかまで、踏み込んで考えてみた。「ことば」とは単に記号なのではなく、音を持つことで人の感情をも揺り動かし、新たな想像力の発揮へとつながるのだという気づきは、大学初年次での学びの土台の一つとなると思われる。参加者にはいわゆる理系大学で教鞭をとられる方々も多く、今後、このような身体ワークショップが大学の専攻を超えてどのように活かされていくべきかを考慮する必要があるだろう。

キーワード : 身体知, からだと言葉, 想像力, コミュニケーション

## I-E「初年次教育学会誌編集委員会企画：初年次教育学会誌への投稿論文の書き方」

担当者： 藤田哲也(法政大学)

概要： 本第5回大会開催の時点で、「初年次教育学会誌」は第4巻第1号まで発行済みであり、次の第5巻第1号の発行に向けて編集作業を行っている最中であった。編集委員会としては、より多くの会員から本誌への投稿論文が寄せられることを望んでいる一方で、掲載する論文については一定の質を保つことに責任を負うという立場にもある。実際に、過去に投稿された論文の中には、残念ながら我々の求める基準に合わずに、掲載できなかったものもある。大学教育においても、到達目標や評価基準を明示することが必須になっている。とりわけ本学会のように、会員の持つ学問的背景に多様性がある場合には、投稿論文に対してどのような観点および基準で査読を行うのかを、事前に周知しておくことが望ましいと考える。そこで本大会ではこの編集委員会企画を、論文の体裁・書式に関する基本事項の確認からはじめ、「研究論文」「事例研究論文」それぞれについて掲載可と判断できるための最低限必要な要素についての、編集委員会の意向を会員の皆様に説明する機会とした(第4回大会とほぼ同内容であった)。

キーワード： 初年次教育学会誌，編集委員会，投稿論文，研究論文，査読

## Ⅱ-A 「初年次教育の評価の方法を考える」

担当者 : 山田礼子(同志社大学)

概要 : 初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なると思われる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。本ワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育を通じて使用あるいは利用している評価方法を互いに紹介しながら、その特徴、利点などをより深く分析することによって、自分の大学に他の評価方法を取り入れていく可能性について検討し、各大学で実施されている様々な評価方法についてお互いの発表を通じて学び合った。大学によっては、評価段階まで到達していない大学もあったが、評価が進んでいる大学等の事例の提示あるいは問題意識を共有することで、初年次教育の内容と評価といった根源的な問題を確認し合うことも可能となった。

キーワード : 初年次教育, 評価方法, 学生調査, 授業評価, プログラム評価

## Ⅱ-B 「初年次学生に対する上級生のサポートをいかに組織化するか」

担当者 : 田中 岳(九州大学)・森川園子(国際基督教大学)

概要 : 初年次学生が大学に馴染んでいく工夫として、教職員や保護者の尽力に加えて、上級生からのサポートというものが考えられるだろう。例えば、入学時の履修ガイダンスや宿泊タイプの新入生歓迎セミナーなど、初年次学生と教職員との間に上手に入り込んで活躍する上級生は、初年次学生の緊張を和らげたり、行事が常態化している教職員に新鮮な気づきを与えたりしているはずである。一昔前であれば、そのような上級生群を大学側が意図的に置くこともなかったのであろうが、今や大学は戦略的に状況を作り出そうとしているといえよう。では、その戦略(方略)とは、一体どのようなものだろうか。本ワークショップでは、組織化というキーワードのもと、参加者全員で集合知を創出することが目的とされた。具体的なマニュアル(地図)ではない、自大学へ帰っても豊かに発想できる「コンパス」を持つことが企図されたのである。それを具現するために、次のような目標、役割、過程が提示され、プログラムは進められた。

[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。[役割] 担当者は会場の相互作用を活性する進行に努めるので、参加の皆さんには主体的な活動をお願いする。

[過程] ダイアログという対話方法を活用し、また各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体でそれらを共有する。

キーワード : 上級生, 上級生のサポート, 教職員, 組織化

## Ⅱ-C 「初年次における多様な学生支援の機能化」

担当者 : 川島啓二(国立教育政策研究所)

概要 : 学生支援が多様で複雑な展開を見せていることは、広くその認識が共有されるようになってきている。今次大会のシンポジウムにおいても、正課教育と正課外教育の織りなす実態を、その担い手の在り方から教職協働の問題軸を設定して、明らかにしようと試みられた(本ワークショップは、大会シンポジウムと連動して企画された)。昨年(第4回大会(久留米大学))においては、ワークショップ「学生支援を構造化する—初年次の取り組みから総合的デザインまで—」と題して、ミニレクチャーとワークを通して、参加者の所属大学における学生支援の洗い出しと観点の提示を行い、その構造化の端緒を得ることを目指して一定の成果を得た。本年のワークショップにおいては、その多様な現状の機能化を図る観点から、指標の構成や担当者に必要な能力の整理とその活用を考えるワークショップを実施した。学生支援は、教育と研究を支える基盤として、大学において重要な役割を果たしてきたが、近年では、学ぶ主体としての学生の積極性、協調性、コミュニケーション能力等を高める機能としての学生支援(ピア・サポートなど)に注目が集まったり、正課・正課外を通して学士課程全体を通じての統合的な学生支援によって、学士課程教育の成果に貢献していくという観点が提起されたりするようになった。その結果、学生支援は、学生相談、キャリア支援、経済的支援、学習支援、ピア・サポートなど、その領域は大変広範なものになってきており、各大学の教育目的や学生の状況に合わせた構造化が課題となってきている。学生支援のメニューは、学年という基本的枠組に依拠できる正課カリキュラムとは異なってアカルト的になっているので、目的、方法、担い手といった要素を勘案しながら整理と構造化が求められる。本ワークショップにおいては、ミニレクチャーとワークを通して、参加者の所属大学における学生支援の洗い出しと観点の提示を行い、その構造化の端緒を得ることを目標として実施された。

キーワード : 学生支援, 正課教育, 正課外教育, 教職協働

## Ⅱ-D 「実際の指導を意識した授業づくりー初年次ライティング指導を例にとってー」

担当者 : 中村博幸(京都文教大学)・吉村充功(日本文理大学)・堀上晶子(河合塾)

概要 : 学生の「文章表現力」を高める為に、「初年次演習」の中でも、大なり小なり「文章表現」を意識した授業内容が多い。また「文章表現科目」だけを独立した科目として開講する場合もあるが、その開講形態は多様である。一方開設にあたり、開設担当者になった教員や、授業を担当する事になった教員の中には、様々な開講状況や授業の組み立てのノウハウに疎い教員も少なくない(コーディネータ教員も同様)。その様な立場の教員が開講にあたり押さえる(準備する)事は何か。たとえば学生の状況把握や到達目標を設定するばかりでなく、カリキュラムに与える担当者の教育観や学習観の影響も大きい。そこで、「文章表現科目」を担当する事になった教員がカリキュラム設計を行うプロセスをワークショップ形式で学ぶ事を企画した。今回は時間の制約もあり、ワークショップ全体の流れを理解すると共に、そのダイジェスト版を体験する。このワークショップの形式は、「文章表現科目」以外にも、「初年次演習」のカリキュラム設計にも応用できると考える。

キーワード : 文章表現, カリキュラム設計, 授業設計, ワorkshop形式

## Ⅱ-E 「初年次教育(基礎演習)の教材を編成してみる」

担当者 : 沖 清豪(早稲田大学)

概要 : 本ワークショップでは初年次教育における基礎演習(基礎ゼミ)で使用する教材の内容・編成について議論した。大学・学部で統一教材を作成するにせよ、個別担当者が既存のテキスト・ガイドを使用するにせよ、担当教員側にとっても受講する学生側にとっても帯・襷の感覚を持ちやすいのが基礎ゼミで使用するべき教科書である。そこで使用する教材の現状を参加者間の情報交換で把握した上で、どの能力を高めるために、どのような構成にしたらよいのか、その際にモデルとなるような教科書はすでにあるのか、既存の教材をどのように活用するか、学習技能中心型でよいか、生活面の支援内容をどこまで組み込めるのか、といった種々の条件を重ねつつ、主に人文・社会科学系の学士課程教育にあたって初年次春学期15回に相当する内容・シラバスとそれを教えるための教材のあり方について小グループで検討した。教科書の編集に携わった方や教材を編集中の教員も参加し、内容検討・教材編纂の苦勞について意見交換を行った。参加者にとっては、教材の問題を通じて、初年次段階で学びに関する意見の多様性を認識する機会になったものと思われる。

キーワード : 基礎演習(基礎ゼミ), 教科書, 教材, 学習技能, 学生支援